



山田の偉人

山田の偉人がのこしたモノ・コト



校歌 佐藤善一 作詞
千葉了道 作曲

(一) 見よ ふるさとの山ひらき
築きあげたる 我が母校
希望が丘に草は萌え
霞がかりて陽を招く
学びの庭の 広くして
ああ 山中に夢多し

(二) 聞けわたつみの歌声か
荒磯に響く潮騒を
オランダ島は松が枝に
虹をかかえて 我を呼ぶ
世界に誇る海なれば
ああ たたえなんともどもに

(三) 見よ 我が光空にあり
天景つくる 山々の
鯨峰いとと神さびて
小鷹むれ飛び 雲あわし
久遠の理想 かがやかに
ああ 山中よ栄あれ



どんな人が、何を
のこしたのだらう。



うみくん 海くん



まつりちゃん



(上左・下右の写真は
いわてけんりつほくがつかんしやう
岩手県立博物館所蔵)





むかしむかしの山田湾



江戶時代の山田湾のようすをえがいた『山田浦海岸之図』(岩手県立博物館所蔵)

えがいたのは絵師・佐々木藍田さん

上の絵は、ずっとむかし、江戸時代の山田湾のようすをえがいたものです。

ずいぶん細かく、正確にえがかれていますね。

それもそのはず、この絵は、盛岡のお城にいるお殿様やお役人に「山田はこんなところですよ」と伝えるためにえがかれたのです。

えがいたのは、山田の川向に住んでいた佐々木藍田さんという人です。

そめもの屋さんをやっていた藍田さんは、ひとりで絵を練習してうでまえを上げ、お殿様にたのまれるほどの絵描きになったのです。のちには、江戸の將軍様に見せるため、大槌にあった金山のようすもえがきました。

いまやまだわん
今の山田湾と
くらべてみよう。



いまくまさん



大槌にあった金山で金をほる人たちのようすをえがいた『金沢御山大盛之図』(岩手県立博物館所蔵)

見よ ふるさとの山ひらき

町長であり小説家、佐藤善一さん

佐藤善一さんは1955(昭和30)年、山田町・豊間根村・大沢村・織笠村・船越村がいっしょになって、今の「山田町」が生まれたときの町長さんです。

佐藤さんは、小説家でもありました。

小説家としてのデビュー作『龍の鬚』は芥川賞の、町長になってから書いた小説『とりつばさ』は直木賞の、それぞれ候補になりました。

どちらの賞も、日本を代表する小説家にあたえられる賞です。



佐藤善一さん

見よ ふるさとの山ひらき
築きあげたる 我が母校
希望が丘に 草は萌え
霞かかりて 陽を招く
学びの庭の 広くして
ああ 山中に夢多し

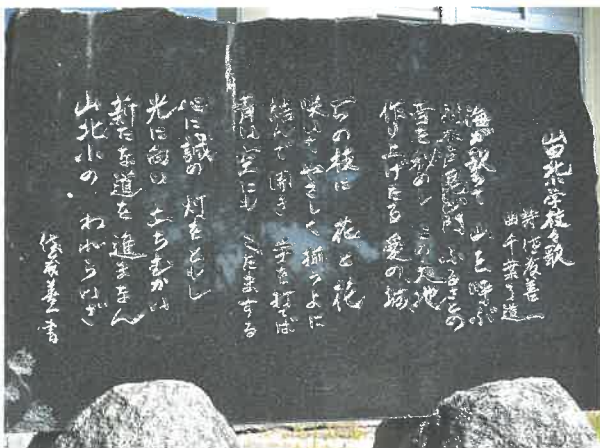
聞け わだつみの歌声か
荒磯に響く 潮騒を
オランダ島は 松が枝に
虹をかかげて 我を呼ぶ
世界に誇る 海なれば
ああ たたえなんともどもに

見よ 我が光空にあり
天景つくる 山々の
鯨峰いとど 神さびて
小鷹むれ飛び 雲あわし
久遠の理想 かがやかに
ああ 山中よ榮あれ

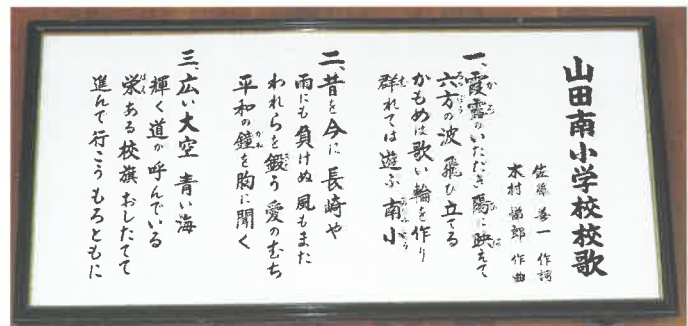


『龍の鬚』の表紙。山田町立図書館にはこの本だけでなく、佐藤さんの書いた本がほかにもあります。

この山田町立山田中学校の校歌や山田北小学校・山田南小学校の校歌の歌詞を書いたのも佐藤さんでした。



山田北小学校の校歌



山田南小学校の校歌

佐藤さんがいなければ、1つの町と4つの村を合わせた今の「山田町」もなかったんだよ。



夏織さん

漁を変えた大謀網

「定置網」は山田生まれ

定置網のしくみはリーフレット①「海のめぐみ」にもなっていますが、この「定置網」が山田生まれだということを知っていますか。

古くからあった漁の方法や道具を改良し、定置網のもととなった「大謀網」を作り出したのは、田の浜に生まれた田代角左衛門さんという人でした。

今からおよそ200年前、江戸時代の中ごろのことです。

よりたくさんの魚をとれるように、漁のしかたを変えた人がいたんじゃ。



越次郎さん



山田の定置網漁では、春はサクラマス、夏～秋はサバ類、イワシ類、ブリの幼魚、スルメイカ、秋はサケ、そのほかカレイ類、ソイ類、アイナメ、マンボウなどがとれます。

みんなが豊かになるように 田代角左衛門さん

江戸時代、船越湾には、夏になるとマグロやブリの大群がやってきました。しかし、当時たくさんの魚をとる漁の方法がありません。主な方法は地引き網などで、イワシなどをとるのがせいっぱいでした。

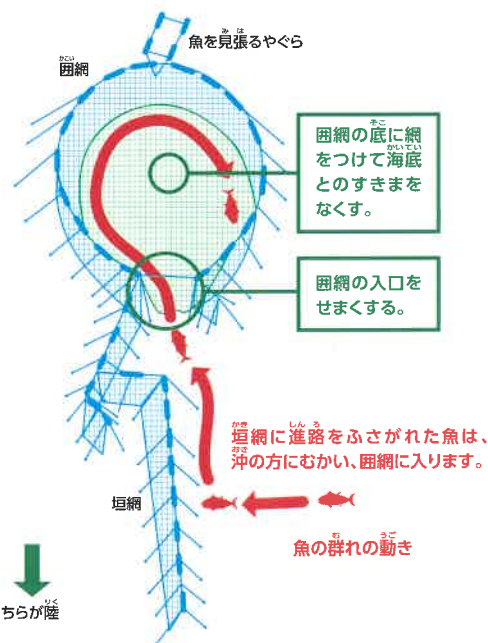
「みんながもっと豊かにくらしたいだろうか」と考えていた角左衛門さんは、陸前にマグロをとる大網という方法があることを知りました。陸前というのは、今の宮城県から岩手県南部にかけての地域です。

角左衛門さんは大網について調べ、大網の欠点に気づき、改良を重ねました。

改良した網を使って、ふるさと田の浜でマグロ漁を行いました。大きなマグロが大漁で、浜の人びとはその大きさや量におどろき、大よろこびだったといいます。

角左衛門さんが考えた漁は「大謀網漁」とよばれるようになりました。

そして大謀網漁は、岩手だけでなく東北や北海道に広がり、今の定置網漁につながっていくのです。



角左衛門さんが改良した大謀網。角左衛門さんのくふう(□の部分)により、魚が逃げにくくなりました。

スポーツで活躍した人びと

力士として十両にまで昇進—前田花英介さん—



タブ

「関取」というのは、
十両以上になった力士
さんのことを言うんだ。



十両のときの取り組み。右が前田花

昔から山田では相撲がさかんでした。山田出身の力士でただ1人、関取にまでなったのが田の浜で生まれた前田花英介(本名:田畑友彦)関です。高砂部屋に入門、1956(昭和31)年の9月場所で初土俵をふんだ前田花関は、1964(昭和39)年の9月場所で十両に昇進すると、9勝6敗と勝ちこします。

その後一度は幕下になりますが、1968(昭和43)年の1月場所で十両に復帰、同じ年の7月場所には自己最高位となる東十両4枚目まで番付を上げました。

右ひざのけがの影響により、27才で引退しましたが、得意技の左四つと寄り武器に12年間71場所を戦いぬいたのです。



前田花英介さん

日本代表としてオリンピックへ—湊義雄さん—

湊義雄さんはボート競技日本代表としてミュンヘンオリンピック(1972〔昭和47〕年)に出場しました。ご本人にインタビューしました。

●ボート競技を始めたきっかけ 山田高校に入ったとき、顧問の先生の熱心な勧誘に根負けしてボート部に入りました。部は1970(昭和45)年の岩手国体をめざしてできたばかりで、自分もボートについて何も分かっていませんでした。

実際やってみると大変でした。1年生の7月からボートに乗せられてひたすら練習、海上に出られない冬はひたすら学校でトレーニングです。

でも、一番の基礎がそういう所だったのはよかったと思います。

●ミュンヘンオリンピックの思い出 出場したのはダブルスカルといって、自分と伊藤選手の2人で漕ぐ競技です。ボート競技は2,000メートルで競うのですが、たいていは漕ぎ手がつかれていない最初の500メートルが一番速いのです。ところが自分らは最後の500メートルを速くする、追い上げて勝つのを強みにしていました。その通り追い上げたのですが、わずかにおよびませんでした。予選敗退です。

くやしいのはあたりまえとして、不思議と「かなわないな」とは思わず「もっとやれば何とかなる」と思いました。

●山田町の若者・子どもたちに 自分にとって「自分になかったもの」「自分が気づかなかったこと」に出会った、それがボートでした。小学校のころから体は大きかったけれど、走るのが速いわけでもなく、運動会は苦手。そんな自分が、ボートのおかげで一人前になったのです。

同じように、だれにでも「自分に合うもの」があります。なので、子どものうちからいろいろなことを体験してほしいです。「自分に合うもの」は、スポーツでも勉強でも自分が一生懸命やらないと見つけれられませんから。



湊義雄さん

山田高校のボート部は、今も山田湾で練習しているね。



ラン

そのとき人びとを救ったのは

3人の電話交換手

1933(昭和8)年3月2日から3日にかけての夜のことでした。そのころ、山田の電話交換所は山田郵便局がかねており、その夜には沼崎ツイさん、内館アキさん、湊チャさんの3人の電話交換手が泊まりこみで働いていました。

真夜中の2時31分、激しい地震がおそいました。交換所は大きくゆれ、電灯が消えました。

ゆれがおさまった直後、大槌郵便局から「いま沖が鳴っているから津波が来そうだ」という電話が入ります。

おろかえし大槌郵便局に電話をすると「津波だ、津波だ」という声が聞こえます。

3人は無我夢中で、136台(当時、山田全体で電話は136台でした)の電話に次々と「逃げてください」という電話をかけていきました。

この電話が人びとの高台への避難のきっかけとなり、津波からのがれることができた人がたくさんいました。

のちに「昭和三陸地震津波」と呼ばれることになる災害の、その当日の話です。

9人の警察官

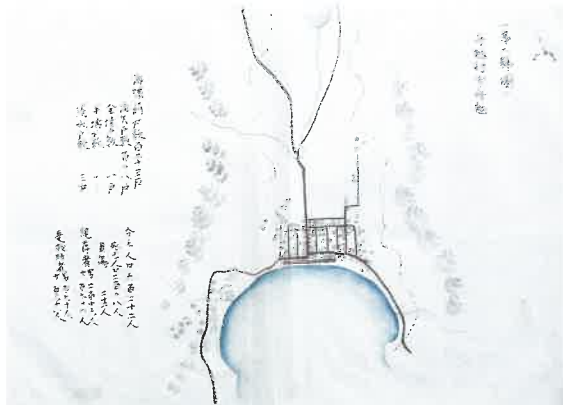
1896(明治29)年6月15日には「明治三陸地震津波」が起きました。地震そのものが弱く、人びとの警戒心が強くなかったところに大津波がおそってきたのが午後8時30分ころ。海岸近くの家は流され、道路はがれきで通行不能、みんな真っ暗な中で恐怖に震えるしかありませんでした。

そのとき、人びとを助けるために働き続けたのが警察官でした。

宮古警察署山田町分署の神貞庸警部、浅利和三郎巡査部長心得と5人の巡査、豊間根と船越の駐在所に1人ずついた巡査の9人です。

当時の雑誌には、9人の働きについて「仕事とはいえ、損得を考えず弱い者を救おうとする気持ちがなければこんなことができるだろうか」と書かれました。

また、のちに浅利巡査部長心得が当時の被害図をまとめた『海嘯被害明細図』(リーフレット④「太古から現代まで」に表紙がのっています)は、明治三陸地震津波の貴重な記録となっています。



浅利巡査部長心得がまとめた『海嘯被害明細図』の舟越村(現在の船越地区)のページ。当時の集落が船越湾に面した低地にあったことがわかります。



3人の活躍を報じた「岩手日報1933(昭和8)年3月2日」の記事(岩手日報社提供)。「山田郵便局交換手の機轉はまた偉大なものがある」と書かれています。

いざというときに、みんなを助けた人たちがいたんだね。

